

残そう、自然の宝石箱・のりくら

くらがね通信

No.15 (新春号)

乗鞍岳の自然を考える会

平成16年1月20日発行

新年の会長あいさつ

飯田 洋

毎年新年の朝は厳粛で清々しい気持ちになります。

お正月明けも比較的好転に恵まれ、青空の下、乗鞍は陽をうけて今年も輝いています。かたや新聞紙上ではお正月気分も一挙に醒めてしまうような自衛隊のイラク派遣や児童虐待の報道など暗いニュースばかりです。今世紀はテロの時代と言われるようになってきており、ヒューマニズムの世紀、環境の世紀は何処かへ消えてしまったような気がします。

ボランティアの環境 NGO として、当会も4年目を迎えることになりますが、直接我々の身近や生活妨害にかかわってこない運動であるため、持続的な活動を続けるのは至難の業ではないかと思ってきましたが、役員、会員の皆さんの力で今日まで継続してきたものです。

美しく快適な環境は人々の共通の願いであり、当会の活動からは目に見える成果は期待できませんが、かかわることによって得られる知識、達成感、及び仲間の輪は、きっと芽を出すのではないかと思います。そして、皆で一地域の自然環境を良くしようと願うことが世界の平和や将来の担い手である子供の幸福を願うことにも繋がるものではないでしょうか。

今年一年宜しく願いいたします。

公開講座『自然談話室』

5月から始めた『自然談話室』、参加者から好評を博しています。参加者から「えっ、そうだったのか。今まで思い違いをしていたんだ。」とか「あっ、そういうふうに見るといいのか」などの声が聞こえています。講演会などでは聞くだけで終わってしまいそうですが、談話室はグループの会話感覚で自由に発言もできます。友達も誘って参加してください。これからもの見方が変わってくるかもしれません。**高山市民文化会館、夜7時**に待っています。

2月 7日 (土) 福井重治氏 (高山高校定時制教諭) 山に生きた人々

3月 16日 (火) 大下大圓氏 (千光寺住職) 日本人の基層文化と山岳信仰

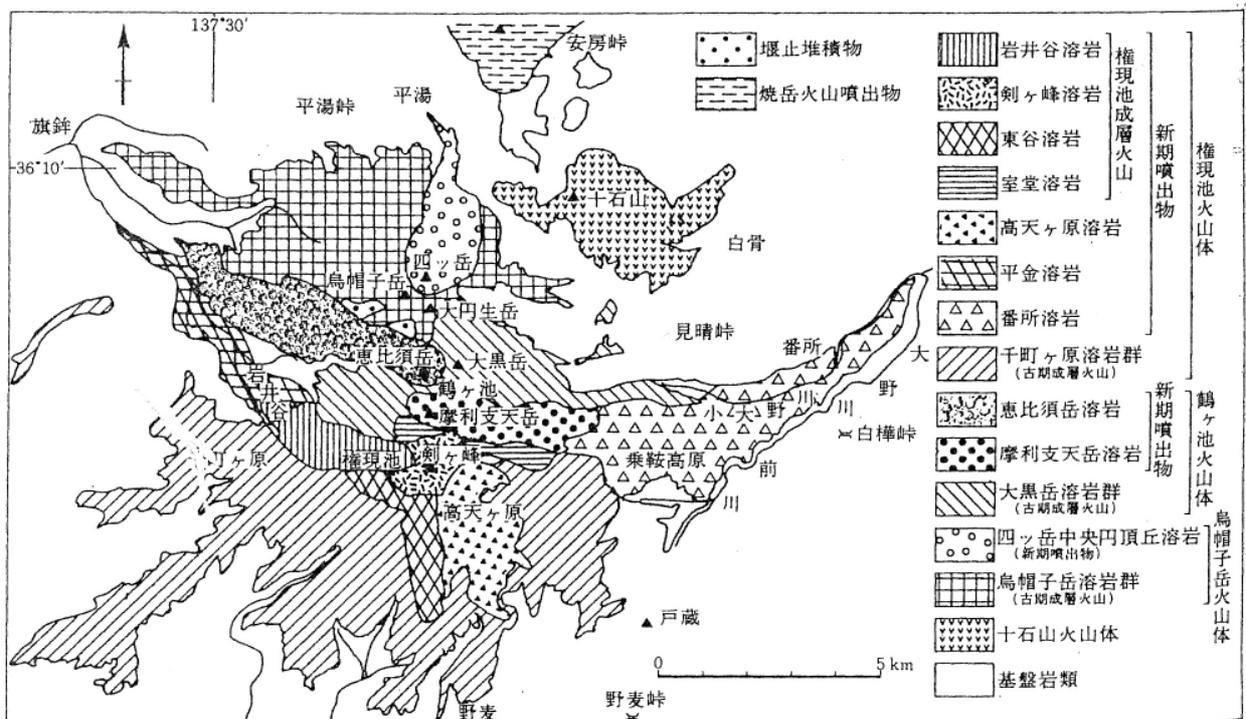
『飛騨山脈と乗鞍岳の生い立ち』

講師・岩田修先生

平成 15 年 11 月 29 日

当会主催の環境講演会が平成 15 年 11 月 29 日に、『飛騨山脈と乗鞍岳の生い立ち』と題して飛騨地学研究会の岩田修先生をお招きして開催しました。岩田先生は写真・グラフ・イラストなどはプロジェクターを使用し、配布資料も併用してわかりやすく話して頂きました。講演の要点を配布資料を基に掲載します。

乗鞍岳は高山市のシンボルのような山で、私も高山で育ってきて子供のときの情景の中に乗鞍が浮かんでくる。稲刈りの時、乗鞍のきれいな夕焼けが鮮明に残っている。その乗鞍岳はどのようにできたのか。9000 年前以降は 800~900 年に 1 回位水蒸気爆発を起こしていて、今も隆起活動がある活火山です。乗鞍火山についてはこれまであまりよく分かっていなくて、最初に調査が行なわれたのは 1911 (明治 44) 年で、それ以降は進んでいなかったが、近年、中野俊さんが乗鞍をくまなく歩き調査し、1995 年に『乗鞍岳地域の地質』5 万分の 1 の地質図にまとめられ、それにより乗鞍岳の生い立ちが分かった。



乗鞍岳火山の地質図(中野, 1984を一部改変)

乗鞍は火山だといってもほんの上っ面で、海拔 2400m までは火山の石でなく、約 2~3 億年前の海底火山または深い海の底で堆積した生物の死骸が固まって出来た硬いチャートや砂岩・頁岩などの堆積岩である。乗鞍は、500m 位の厚さで火山の石がおおっている。つまり乗鞍というのはもともと高いところに出来た火山で、火山だけれど火山の石は山頂付近に分布しているというのが特長。御岳・立山なども同じだ(立山の最高峰雄山は火山の石ではない)。

中部地方の火山は富士山・伊豆箱根・伊豆諸島・信州・白山などがあり、乗鞍もその中の一つでそれぞれに特徴がある。御岳・乗鞍・焼岳・立山・白馬・湯ヶ峰等を含めて乗鞍火山帯(列)という。御岳・立山は関東方面にも火山灰を降らしているが、乗鞍は火山灰をほとんど出さなくて、溶岩を流出させている。(焼岳もおなじ) 又、乗鞍は活火山だが火山の割には付近に温泉が少ない。

飛騨山脈は大きな断層活動によって出来た山ではなく、300～250 万年前から段階的に上昇してきた。その原動力は、太平洋やフィリピンプレートがぶつかって圧縮力が働いているからだ、マグマが地下に入ってきてその浮力や圧縮されやすさ、が高い山にしていると考えられている。また、地殻均衡といって削られた山地が軽くなって浮力が働き上昇する効果もある。(研究者により他の説もある)

乗鞍は、数回の火山活動を繰り返した複数の火山が集合した「複合火山」であり、噴火中心が南北に配列していて、噴火時期は長い休止期をはさんで大きく古期と新期に分けられる。

○ 古期火山活動

千町火山体・・・128～125 万年前 (千町北溶岩)
92～86 万年前 (千町溶岩)

● 休止期

○ 新期火山活動

烏帽子火山体・・・32～12 万年前 (烏帽子溶岩)
(大丹生岳・猫岳・四ッ岳は烏帽子火山が侵食されて現在の形になった)
四ッ岳溶岩・・・4 万年前
恵比須火山体・・・2 万年前 (恵比須溶岩)
権現池・高天原・火山体・・・10～0 万年前
岩井谷溶岩・・・9000 年前、最後の溶岩

9000 年前以降少なくとも 10 枚の火山灰・・・平均 900 年の周期で小規模の水蒸気爆発を繰り返していた。今後、乗鞍が噴火するとしたら、権現池・剣ヶ峰あたりで、1979 年の御嶽山の突然な噴火のように水蒸気爆発の可能性が高い。

大きな爆発は 10 万～数万年位の周期で起きていて、今度起きるとすれば権現池・剣ヶ峰あたりか？それとも新しい場所に新火山ができるか。マグマが噴出するような爆発は、火山性の地震が生じるので予知ができるかも知れない。

○ 乗鞍岳にある池は火山活動によって出来たもので、氷河による池は無い。(カールなど氷河地形が残っていないので、氷河は無かったようである<何故？>)

堰き止め湖・・・土樋池、大丹生池、(溶岩により)・五ノ池・鶴ヶ池・不消ヶ池
火山湖・・・亀ヶ池(恵比須火山)・権現池(権現火山)

○ 構造土・・・亀甲砂礫・・・平坦地で礫が六角形の模様に並んでいる(亀ヶ池・鶴ヶ池。今は消滅)
日本で初めて発見された亀ヶ池のものは網目の直径は 30～50cm あった
条線砂礫・・・傾斜地に礫が線状に配列している(不消ヶ池)

乗鞍岳登山史-12<丹生川村史から>この連載は丹生川村教育委員会および西村宏一氏の了承済みです。

集団登山さまざま

昭和 11 年大阪府八尾高女から本役場へ照会があった。同校の登山部員 30 人が、上高地から下山の途中、平湯に宿泊したいから、旅館を紹介して欲しいという内容である。女生徒が集団で遠隔地の山に登る時代になったのである。しかも手紙の文面には「泊まる場所さえ出来りや結構です」「旅館これ無き折りは泊まる方法をお示し下さいまして結構に存じます」とあり、かなり山慣れている様子である。役場では隣村のことであるが、懇切に情報を返信している。平湯からさらに乗鞍へ登山したかどうかは不明である。

13 年飛騨山岳会と高山観光協会が主催し、34 名で大八賀の生井から大尾根に上り、山口谷を下って桜小路に出るコースを歩いた。日中戦下のこともあってか「徒歩行進」とこれと呼んでいる。

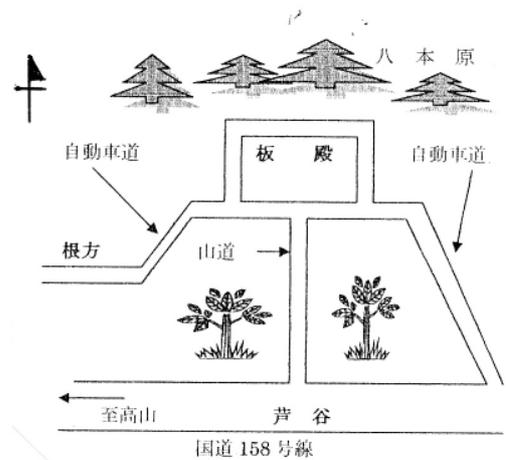
同じ年青年山岳講習生・斐太実業学校生徒・岩滝小学校児童・女子青年学校生徒らが、相次いで乗鞍に登山し、皇軍の武運長久を祈願した。「手製の草鞋を履いて」「野外戦闘教練のため武装して」「下駄履きで」などと『高山市史』は、その登山姿を記している。(西村宏一)

乗鞍展望お勧めスポット

その1 丹生川村板殿



丹生川村芦谷の中程、国道158号線沿いの山の斜面に弘化五年と記された道祖神の祠があります。そこから山の上に通じる道を10分ほど歩くと、一気に視界は開け戸数十数戸の板殿集落が現れます。この村からは東に乗鞍、南西に白山を望むことができますが、殊に乗鞍岳の眺望は絶景です。ここは明治から大正にかけて家族を省みず乗鞍に一生を捧げ、登山道の整備や遭難者の救助にあたった『板殿仙人』こと板殿正太郎の生地です。又村のあちこちには道祖神・地蔵菩薩などが祀られ、毎年大晦日になると手に手に明かりを持った村人たちが神社を初めとして各石仏を参る「七社参り」が行われるそうです。冬になると真綿の頬かむりや涎掛けを着せられた地蔵様に、村人の信仰の厚さを伺うことができます。近年道路が整備され、根方・芦谷から車で村へ入ることも出来ます。



「お地蔵様が寒くないように」

新入会員紹介 (前号以降及び紹介漏れ・敬称略) 平成15年12月末会員数 一般170名・6団体
 門前恵美子(高山市)・若田等(丹生川村)・国際ソロプチミスト高山(高山市)

■ **会員を募集しています！** 年会費 = 個人 2,000 円 家族 3,000 円 団体 5,000 円
 あなたの知人、友人に
 入会をおすすめください

- ・ 郵便振替 00800-8-129365
- ・ 振込先 乗鞍岳の自然を考える会

くらがね通信 第15号 (新春号) 平成16年1月20日発行
 発行者 乗鞍岳の自然を考える会 〒506-0055 岐阜県高山市上岡本町4-218-3 飯田 洋
 TEL 0577-32-7206 ・ FAX 0577-32-7207

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。

■ 編集責任者 : 宝田 延彦 E-mail : nobu1995@peach.ocn.ne.jp TEL(FAX 兼) 0577-34-1287
 ■ 編集者 : 住 寿美子 TEL 0577-34-7237 : 栗田 美由紀 TEL 0577-33-0179
 表紙写真提供 : 小池 潜 印刷 : ウィット企画